

三節 浮世絵

京都 青蓮院



3.1 本節の目的

本節では浮世絵の分析を通して、時代の変遷と共にどのように「無意識に記憶された景観」としての夜道が変化したかを捉える。

(週刊誌や新聞に連載され、後に単行本となるような漫画は比較的新しいものに限定されている。一節で扱ったものでも1946年のサザエさんが最も古いものとなっている。そこで、「無意識に記憶された景観」としての夜道がどのような変遷を辿ってきたかを知る為に本節では絵巻物と浮世絵の分析を行う。)

3.2 本節の構成

3.4 現代とは全く異なる生活であった平安時代の、夜道がどのようなものであったか知る為に、一遍上人絵伝および、年中行事絵巻を分析する。

3.5 江戸時代以降の夜道をを知る為に、江戸時代は広重の作品をケーススタディーとして、そして江戸以降は、光線画と呼ばれる画風の浮世絵を分析する。そして人工照明の普及によって「無意識に記憶された景観」としての夜道がどのように変化したかを捉える。

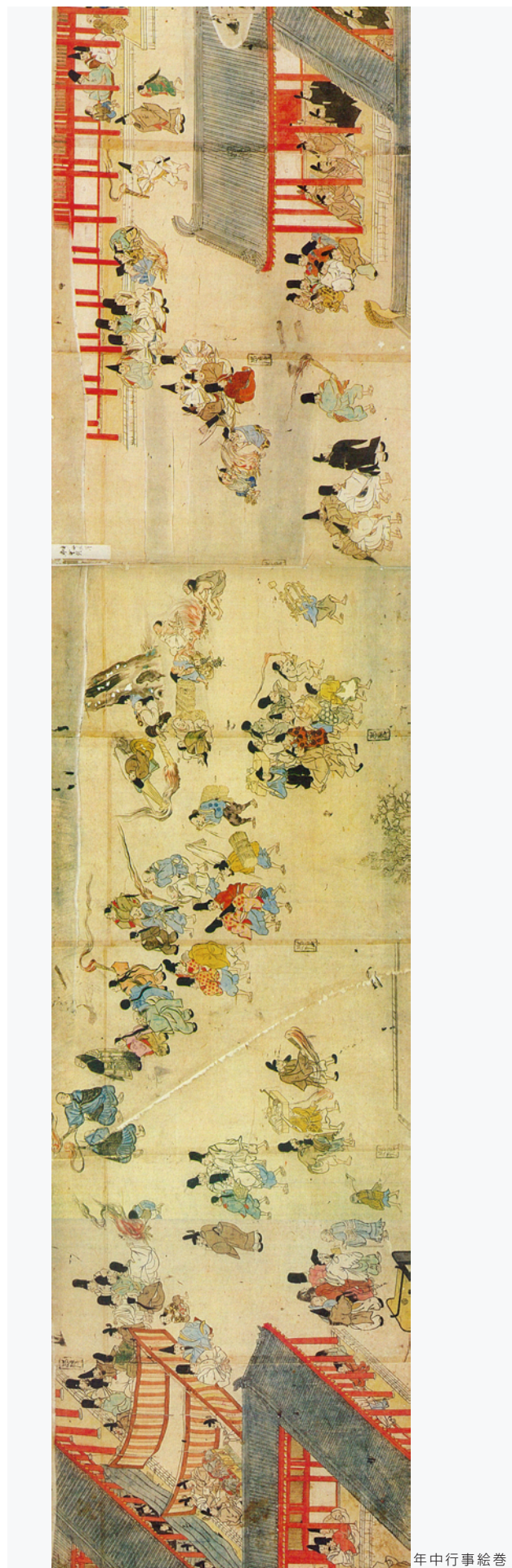
広重の浮世絵と光線画を比較する為に以下の方法を取る。

3.5.1 分析対象について

3.5.2 絵の中のハイライト部分、シヨドウ部分に見る光りへの関心。明度を色に置き換えることで、絵の中で明度がどのような扱われ方をしているか分析する。

3.5.3 浮世絵の色を個別に平均化した。その平均化された色の、色相-彩度 色相-明度 より、広重の昼の浮世絵、広重の夜の浮世絵、光線画、の色の傾向について分析する。

3.6 まとめ



年中行事絵巻

3.3 分析対象

江戸時代以前（平安時代）

☐一遍上人絵伝

☐年中行事絵巻

江戸時代

☐名所江戸百景

☐広重の他の作品

明治以降

☐光線画

3.4 江戸時代以前の夜道

平安時代の夜道

一遍上人絵伝は一遍の死後（1289）10年にして描いたものといわれており、各地の風物は写實的に描かれているため、当時の生活を物語るものとして資料性が高い。そして、さりげなく描かれたものの中に当時の文化の実態をうかがう事ができる。

この絵巻には夜の様がほとんど描かれていない。わずかに片瀬で野宿したとき、柱松明をともし、夜のあかりにしている様子が描かれているのみである。ここから考えられるのは、一般大衆の生活の中には夜の明りがほとんど無かったという事である。貴族の生活には、燈台や燭台や篝台もあったが、大衆の生活にはそれが無かった。大衆は、夜に家から出る事も無かったと考えられる。

当時の大衆にとって夜は自分達の世界の外側にあるものだったのであろう。（参考：日本絵巻大成 月報22）

年中行事絵巻は、平安時代後期の貴族の生活が描かれたものである。

こちらでは、一遍上人絵伝とは異なり、夜の行事の様子も描かれている。

あまり明りが無かった当時、夜も明りを灯して楽しむというのは、祭りという特別な時間を盛り上げるのに効果的な演出であったと考えられる。

一遍上人絵伝のなかに唯一登場する夜のシーンを見てみると、現代の私達にも理解可能な夜の記号は松明と、そこから立ち昇る煙のみである。回りの景色や、人々は昼と同様に描かれているのである。

これは、年中行事絵巻でも同様である。

日がすっかり暮れた頃の絵であるが、決して絵本のように、空や雲が黒く塗られたり、画面が青く塗られたりすることは無い。室内と室外の間にも特に差は見られない。

こちらでは歩いている人が松明を手にかかげたり、路上で焚き火をする人達がいる。

夜のシーンでは、必ずこのように松明をともしなど、火をたいている。

ここに描かれている人達は、ただ外で語り合ったり、ふざけあっ



一遍上人絵伝



年中行事絵巻



年中行事絵巻



年中行事絵巻

たりしている事を十分に楽しんでいるように見える。

年に数回、彼らの生活の中に現れる夜道は祭りの場だったのである。

夜が暗く描かれないのは、普段真暗な夜に慣れている当時の人々にとって、活動できるような松明が灯っているだけでそれは非常に明るく特別なものとしてうつったからではないだろうか。

ここで描かれている夜は、昼との比較による暗い夜では無く、普段真暗な夜との比較による明るい夜なのである。

3.5 江戸時代以降の夜道

3.5.1 分析対象について

□広重

江戸時代に入ると、浮世絵において夕刻、夜、早朝も描かれる対象となっている。

広重は、夕暮れや夜景、雨や雪など、一日の特定の時刻や気象を指示するモチーフを好んで描いた。

一瞬のうちに過ぎ去っていつてしまう時間の儚さもまた、広重の好んで描くものであった。

これは、庶民の生活に関わるような夜が全く描かれなかった一遍上人絵伝と対比的である。

江戸になると、夜も生活圏内に入っていたのである。

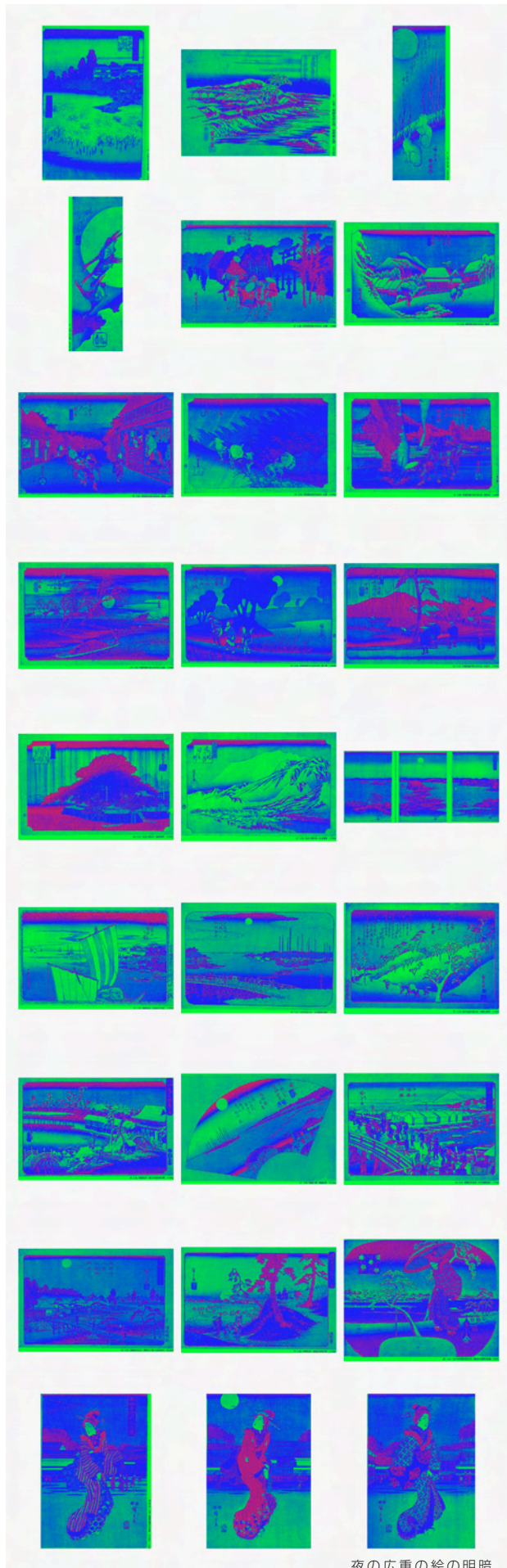
□光線画

光線画と命名して刊行された清親の新様式の名所絵の制作は明治9年8月にはじまる。清親の光線画の特質は、光りと影、光のゆらぎ、色彩の変化をリアルに細やかに捉えた点にある。明治初期の西洋文明の移入期にあって、新しい洋風の手法で東京の名所を描いたものとして、少なからず好感を持って迎えられた。(原色浮世絵大百科事典第9巻：銀河社、昭和56、大修館書店)

西洋文明が移入してきた事によって、それまでは無かったガス灯等が街にあらわれ、夜の景観が一変したこともまた、このような作品が生まれた背景になっている。

光線画の最大の特徴は、そもそも夜を主題とするような様式を開発したことにある。

この光線画と呼ばれる手法を用いた画家として、小林清親、清親の弟子である井上安治、小倉柳村を本論では扱った。いずれも明治9～20年ごろに製作された作品である。

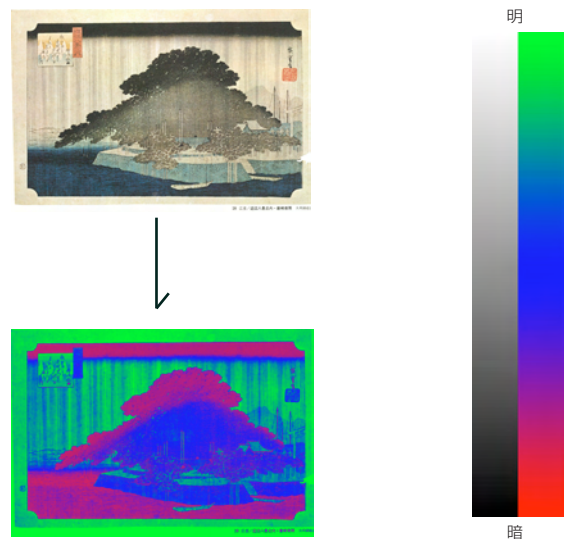


3.5.2 絵の中のハイライト部分に見る光りへの関心

絵の中で、最も明るく描かれている部分はどこか、またそれはどのように描かれているかを見ることによって、どのような光あるいは、暗闇に対する関心を持っていたかを考察する。

3.5.2.1 方法

絵の中の明度を、色に変換し、絵の明度ハイライト、中間色、シャドウ部と、読み取りやすくし、分析する。



3.5.2.2 広重

明らかなのは、広重の浮世絵は、地となっているのは、青や緑、つまり明度の高い色である。そして、赤、つまり明度の低い色は、輪郭線や、一部の影に使われているのみであるという事である。

これは、昼の描画方法と基本的に同じである。

次々ページの昼の広重の絵の明暗と比較すると全体的に緑の中間色のハイライト部分が減り、青の昼間色の部分が増えているものの、全体的にコントラストが下がっているだけで、赤のシャドウ部分が増えているわけではない。

■ハイライト部分

□広重の絵の中のハイライトのほとんどは、道や、空、川といった、広い面である。

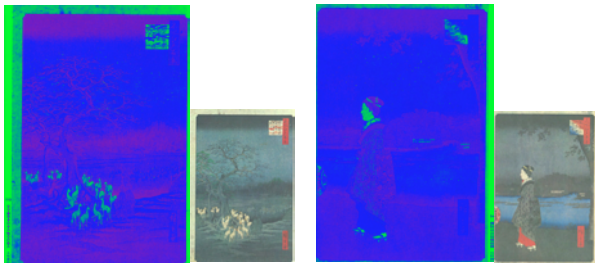
広重は、画面全体を暗くするような手法を用いる事はあまりなかったようである。

ただ名所江戸百景の中であれば「王子装束ゑの木大晦日の狐日」や「真乳山山谷堀夜景」などの例外がある。

広い面以外で、ハイライトになっている部分について以下にあげて考察する。

□人の顔や、人、狐（幽霊的）

これは、光りを描いているわけではなく、絵の中で重要な部分を浮かび上がらせる効果を狙って用いられている技法だと考えられる。



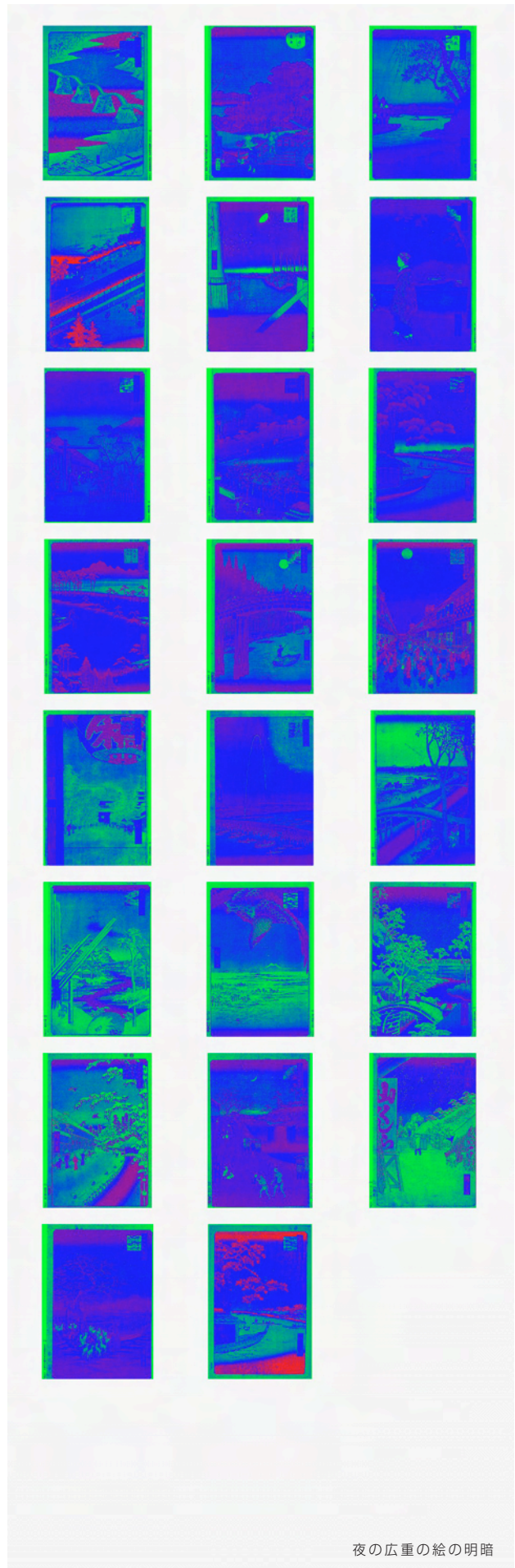
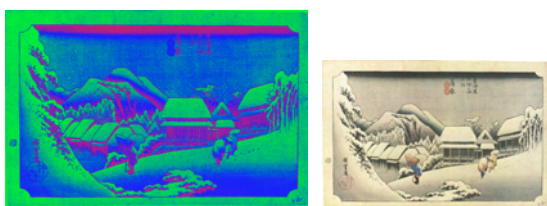
□月

月は三日月よりは、満月に近い月を好んで用いたようである。月は、単調になりがちな空に変化を与えるという審美的な判断と、夜のアイコンという二つの観点から用いられていたと考えられる。

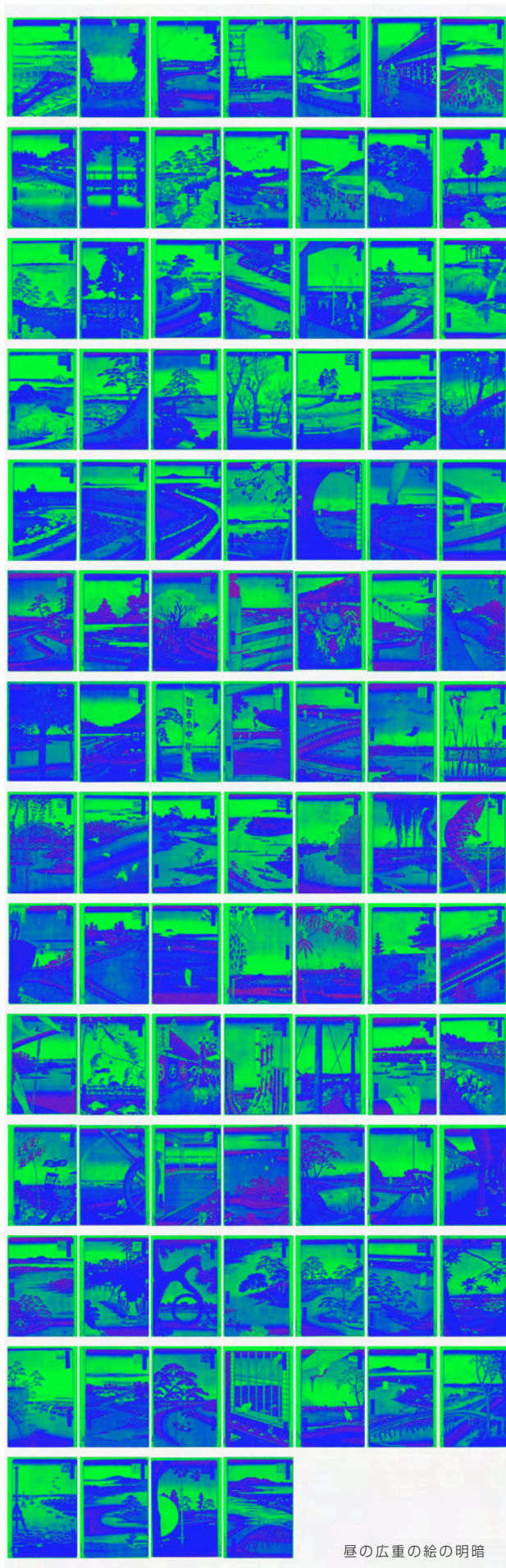


□建築物の屋根

遊郭などの一部の例外を除いて、窓などが明るく描かれる事は広重の浮世絵ではなかった。民家の壁はむしろ低い明度で描かれているのが普通である。これは、漫画でみた窓の明りのあり方と随分違う点である。広重の絵で明るいのは、建物の屋根なのである。とくに雪景色の中の屋根は印象的である。建築の屋根は他の山などの地形的な要素と同じような扱われ方をしているのだ。



夜の広重の絵の明暗

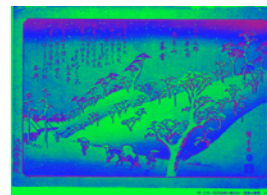
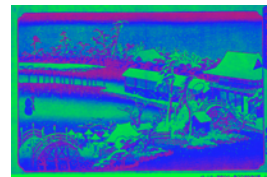
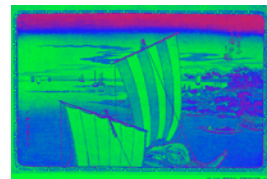


■シャドウ部

□画面上部1/10の夜

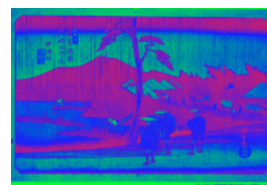
まずあげなければならぬのが、絵の上の部分、空が全く入っていないような特殊な構図の場合を除き、黒く墨で塗られているという事である。

空全体が塗られているわけではなく、縦使いならば、画面の上部1/15、横使いならば1/10程度である。広重の浮世絵において絵の上部に塗られた薄墨は夜の記号なのである。



□建物の壁面

これについては、ハイライトの屋根についての説明で既に書いた通りである。壁面がシャドウ部となっている。



3.5.2.3 明治以降 光線画

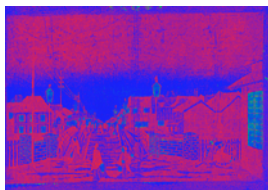
見て明らかに広重の絵と比べて赤い部分が多い。そしてただ多いだけでなく、赤い部分が地となっている絵も多数見られる。

■ハイライト部

□光線

光線画におけるハイライト部分は、まさにそのまま光線部分である。街灯の光を発する頭部分であったり、窓の明りであったりする。

その描かれ方はまさに、光りの美しさに対する賛美である。

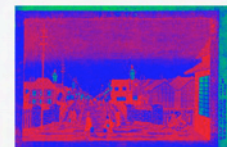
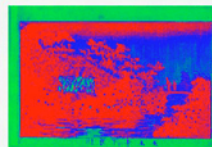
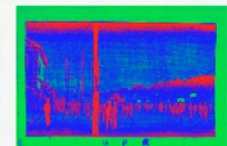
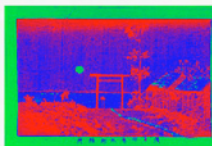
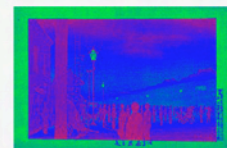
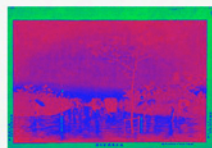
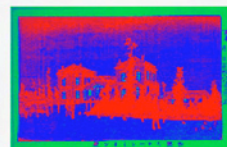
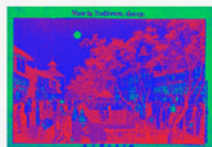
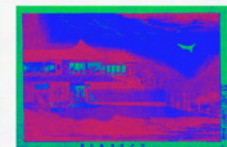
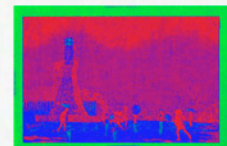
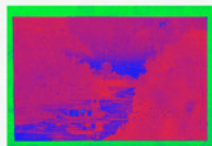
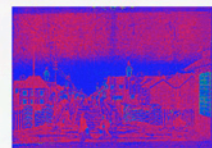
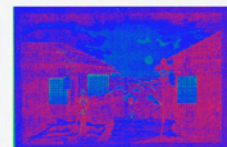
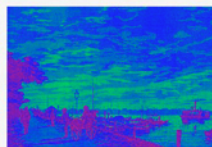
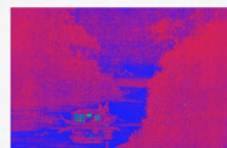
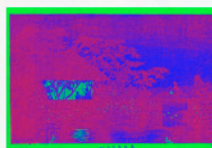
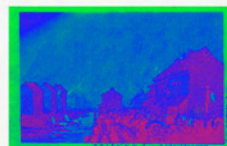
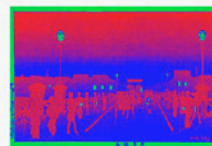
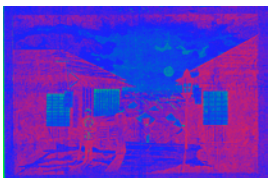


□月

広重の浮世絵の中ではハイライト部分としてたびたび登場とした月も、光線画では、人工的な明りが主題になったために、描かれる事が少なくなった。

■シャドウ部

・光線画においては、ハイライト部以外のほとんどの部分がシャドウ部分であることも珍しくない。真っ黒な画面の中にポツリポツリとハイライト部分が、ハイコントラストに描かれるのである。



光線画の明暗

3.5.2.4 まとめ

広重の浮世絵では画面の大部分は明るく描かれ、画面の周辺部分や、建物の外壁などを黒く塗る事で夜を表現していた。言い換えると、人工的な明りではなく、月夜などで照らし出された夜を描いていた。これは、広重の描いた昼の絵と比較するとよくわかる。

光線画では、画面全体を暗く塗り、人工的な光線を発する部分のみが明るい部分として描かれるようになった。

その結果として、建築を見たときには、広重の絵では屋根が最も明るく描かれているのに対して、光線画では窓の明りが最も描かれるようになった。

これは、現代における明かりの感覚に近いものである。
ガス灯の登場によって、夜というものに対する視点が変わった。

万遍なく薄暗かった夜が、強烈な明りを発するガス灯の登場によって、真暗になったのだった。

ガス灯の登場によって、夜は暗くなった。

3.5.2 絵全体の色に見る、夜に対する感覚

画面全体の印象となる色から夜がどのように表象されていたかを分析、考察した。

広重の昼の浮世絵、広重の夜の浮世絵、光線画を比較した。

3.5.2.1 方法

絵全体の色調を分析する為に以下のような方法を用いた
絵本で用いた方法とほぼ同じものである。

1. 浮世絵は、紙の黄ばみが強い為、まずは、黄ばみを取り除いた。

2. Adobe® Photoshop® CS2 のぼかし
フィルタの平均化の機能を用いてその
絵の平均値を求める。

ぼかしフィルタ：平均

画像全体または選択範囲から、その範囲の平均値のカラーを探し、画像全体または選択範囲をそのカラーで塗りつぶすことによって滑らかな効果を与えます。例えば、草の領域を選択して平均フィルタを適用すると、その領域全体が一様な緑色に変わります。(Adobe® Photoshop® CS2 のヘルプより抜粋)



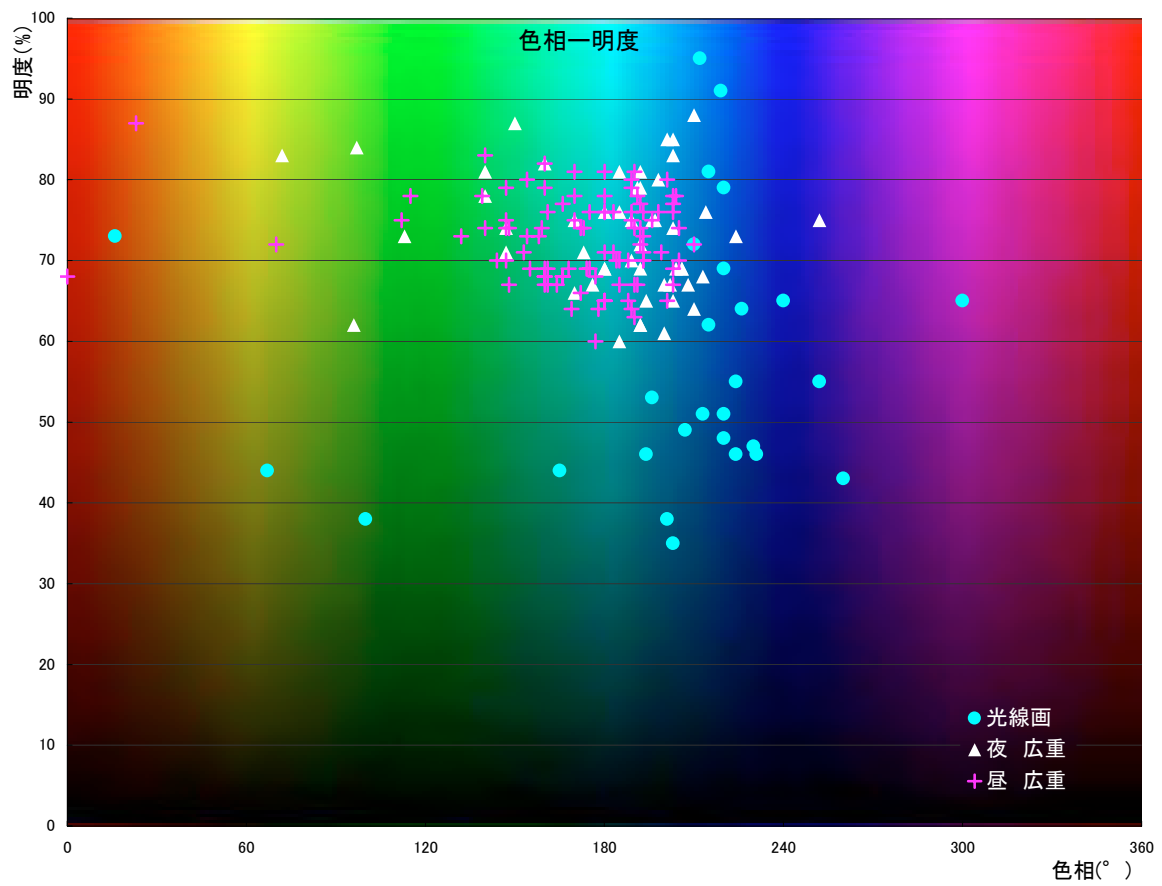
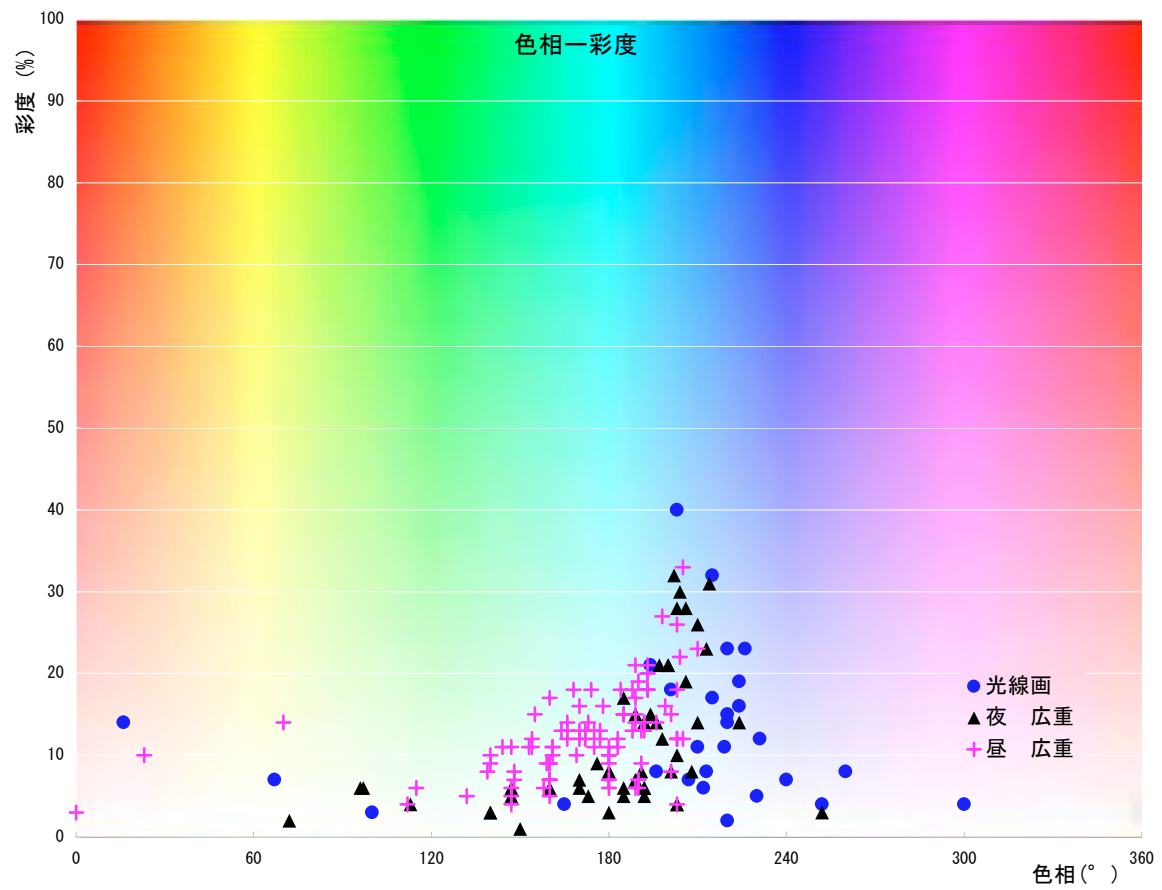
3. もとめた平均値を、色相－彩度、色相－明度、のグラフにプロットする。

4. グラフを分析し、必要に応じて元の絵を再度参照する。

次ページがプロットしたグラフである。
分析は次々ページ以降述べる。



広重の昼の浮世絵



3.5.2.2 広重

■色相—色彩の図

この図からわかる事は、

夜の絵の色相は彩度 10% 以上で、 $180 \sim 225^\circ$ 前後の青である、また彩度が高くなるほど、バラつきが減り、 210° 前後になる。浮世絵は、その大量生産される性格から、使える顔料の種類等が限定されていた。これが彩度が高くなる事でバラつきが減る理由であると考えられる。

そして、昼の絵の色相は彩度 10 以上で $130 \sim 210^\circ$ である。これは、夜と比較すると、全体的に青から、緑よりのなったという事である。

これをもとに実際に絵をみると、広重は、昼の絵では鮮やかな緑を用いるが夜ではそれを用いていない。

絵本と同様、鮮やかな緑は昼のアイコンなのである。



鮮やかな緑で描かれた
広重の昼の絵



彩度の低い緑で描かれた
広重の夜の絵

また、昼の絵のほうが、夜の絵に比べ彩度が低くなっているのは、様々な人がカラフルに使われているため結果としてそれらが混ざり合っている為である。

広重の絵においても、夜のは絵は青がちなのである。

■色相—明度の図

明度が、昼も夜も、60 から 90 の間である。

つまり、ハイライトとシャドウの項で述べたように、暗さによって夜を表現していないということがここでも確認できた。明度と、彩度の間にもとくに関係は見られない。



広重の夜の浮世絵



光線画

3.5.2.3 光線画

■色相—彩度の図

彩度が 10% 以上の絵の色相は $190 \sim 225^\circ$ である。

光線画は、広重の夜の絵と比べ青っぽいという事ができる。

■色相—明度の図

明度のバラつきの幅が広く $30 \sim 80\%$ 程度である。

光線画は、広重の絵に比べて全体的に黒い事がわかる。

明度が低い絵は、広重の絵の中には見られなかった明かりが図となっているような絵である。

光線画は黒さによって暗さを表象しているのである。

3.5.2.4 まとめ

□鮮やかな緑色の植物は昼のアイコンである。

□浮世はその性格から色相のバラつきが少なく、色が記号的な扱われ方をされやすい。

□広重の絵では、昼と夜で明度が変わらない。

□広重の絵は昼より夜のほうが使われる色が少なく、結果として青っぽくなっている。言い換えると、広重の絵では明度によってではなく、使われる色の少なさで夜らしさを表象している。

□光線画は明度の低さによって夜を表象している。

3.6 まとめ

■平安時代

夜が暗く描かれないのは、普段真暗な夜に慣れている当時の人々にとって、活動できるような松明が灯っているだけでそれは非常に明るく特別なものとしてうつったからではないだろうか。ここで描かれている夜は、昼との比較による暗い夜では無く、普段真暗な夜との比較による明るい夜なのである。

■江戸時代以降

□夜は平安時代とは異なり、一般大衆の活動範囲になっている。

□広重の浮世絵では画面の大部分は明るく描かれ、画面の周辺部分や、建物の外壁などを黒く塗る事で夜を表現していた。言い換えると、明るい部分が地で暗い部分が図なのである。広重の絵では、昼と夜で絵全体の明度が変わらないのである。それは、人工的な明りではなく、月夜などで照らし出された薄暗い夜を描いていた。からである。

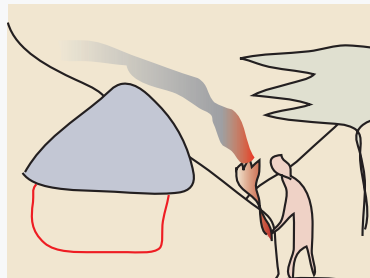
□広重の絵は昼より夜のほうが使われる色が少なく、結果として青っぽくなっている。言い換えると、広重の絵では明度によってではなく、使われる色の少なさで夜らしさを表象しているのである。

その中でも、昼の明るさを表象している事がわかった、鮮やかな緑色の植物はとくにその傾向が顕著であった。

□光線画では、画面全体を暗く塗り、人工的な光線を発する部分のみが明るい部分として描かれるようになった。つまり暗い部分が地となり、明るい部分が図となっているのである。光線画は明度の低さによって夜を表象しているともいえる。

その結果として、建築を見たときには、広重の絵では屋根がランドスケープと一体化するように明るく描かれているのに対して、光線画では窓の明りが全体から異質なものであるように最も明るく描かれるようになった。

それぞれの模式図



平安時代



広重一昼



広重一夜



光線画

□光線画の光りや夜の感覚は、漫画との比較から現代におけるそれと感覚に近いといえる。ガス灯の登場によって、夜というものに対する視点が変わったのだといえる。

万遍なく薄暗かった夜が、強烈な明りを発するガス灯の登場によって、真暗になったのだった。ガス灯の登場によって、夜は暗くなったのだ。

